

てんかんとその境界領域

鑑別診断のためのガイドブック

Markus Reuber, Steven Schachter【編】

吉野 相英【監訳】

評者

重藤 寛史

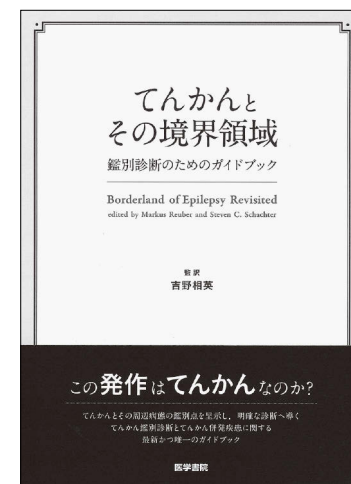
福岡山王病院てんかん・すいみんセンター/国際医療福祉大学福岡看護学部

てんかん診療を行っていて痛感するのが、いかに多くの「てんかんのようくてんかんでない疾患」がてんかんと診断され、治療されてしまっているか、ということである。てんかんと診断されることによって患者が被る社会的損失、そして抗てんかん薬治療によって生じる身体的損失を考えると、常に「てんかんではない」可能性を念頭に診断することは基本的かつ極めて重要な姿勢である。しかし、てんかん専門医にとっても「てんかん」と「非てんかん」の鑑別は困難なことが多い。本書はその鑑別に重点を置き、図や表を用いてわかりやすく解説した、最新かつ唯一のガイドブックであり、本邦の神経学の第一線で活躍する訳者らが、豊富な臨床経験に基づいて的確に訳した名著である。

本書は、神経学の父であり、てんかんに神経疾患として独立させようとしていたガワーズが100年以上も前に記した『Borderland of Epilepsy』を原型とし、神経学の黎明期から存在する「てんかんと

その境界領域」を、現代医療の知見をもって「再訪する」という形で構成されている。各章のはじめにある「要約」と「はじめに」には、各疾患に対するガワーズの時代の理解と現代における理解との比較が記述してあり面白い。本文では、ビデオ脳波、筋電図、心電図、脳画像検査、超音波検査、遺伝子検査など新たなテクノロジーを得た現代の専門家によって、てんかんの境界領域である疾患の発症メカニズムと鑑別のロジックを詳細に解説していて、なるほど、とうなずいてしまう。失神、心因性発作、パニック発作、めまい、頭痛、一過性脳虚血、一過性健忘、睡眠関連の発作、アルコール関連の発作、不随意運動などのてんかんと鑑別を要する疾患に加え、自己免疫介在性てんかん、非けいれん性てんかん重積、自閉症、抑うつなど、現在のてんかん学でトピックになっている疾患にも多くのページを割いており最新の知見を得ることもできる。

単に教科書的で平板なガイド



ブックと異なり、ガワーズが多大な症例観察に基づいた記述をしていたのと同様に、本書でも多くの具体的な症例を取り上げて、それらの症例を科学的に解説しているため、推理小説的な面白さも併せ持っている。また、てんかんの境界領域である疾患の治療を、最新の情報に基づいて総括的、具体的に提示している唯一のテキストであるので、明日からの臨床に、すぐにでも役立てることができる。てんかん学の初心者から専門家まで、小児科から成人科まで、てんかんと診断することの難しさ、てんかんの境界領域にある疾患の治療の困難さ、に直面している者が、常に傍らに備えておきたい一冊である。

B5・頁 344 2017 年 6 月
定価：本体 10,000 円＋税
[ISBN978-4-260-03023-6]
医学書院刊